はじめに

国際学部附属多文化公共圏センター　センター長　倪　　永茂

本年度では、大学院研究科の改組に合わせ、SDGs（持続可能な開発目標）という言葉が本学でも盛んに聞かれるようになった。SDGsに関連するシンポジウムの開催、教員の研究業績とSDGsとの関連性、学生が受ける授業シラバスとSDGsとの連携性等、研究と教育の両面からSDGsを意識する雰囲気がキャンパス内で醸し出されている。

本センターのいままで取り組んできた各事業やプロジェクトは、必ずしもSDGsを考慮に入れて始まったわけではなかったが、17のゴールと照合すれば、それぞれがひとつか複数のゴールを目指していることは明らか。SDGsの普遍性や社会的課題と密に関わっていることが理解されよう。

そこで、本年報はSDGsを特集のテーマにした。学部教員の教育と研究をSDGsという視点で見えるものと課題、学生の対談にみる学生側の捉え方、また、SDGsへの貢献を狙った女性教員のダイバーシティ研修報告等が内容となっている。SDGs特集のほかに、８篇の投稿論文もSDGsや多文化共生に寄与する研究であることはいうまでもない。

多文化共生に関わる事柄が本年度も多く起きていた。韓国とのギクシャクした関係が改善されておらず、米中両国の貿易摩擦が貿易赤字の削減から、ハイテク分野での覇権争いへとエスカレートしている。イギリスのEU離脱プロセスが国民の分断をもたらし、６月以降続いてきた香港反政府デモは官民の対立、住民同士の対立を深刻化している。一方、良いニュースといえば、スウェーデンの環境活動家グレタ・トゥンベリさんが９月に、国連本部で開かれた「気候行動サミット」で演説したことは、世界のひとびと、とくに若者が気候変動に対する問題意識を大きく変えるきっかけのひとつとなるだろう。

さて、センター長になった一年を振り返ってみると、センターの業務に関わった経験がいままでそれほどない身として、当初は結構戸惑っていた。昨年度までに活躍していた事務局スタッフの交代に伴う業務の引き継ぎがうまく行かなかったのが原因だったかもしれない。いわば、センター長も事務局新しいスタッフも模索しながらのスタートだった。業務内容の把握、Webサイトの更新、事務局予算の確保、各プロジェクトの予算申請、広報ならびに情報発信、月一回の運営委員会の開催等、自分の教育研究に加えてセンターの運営に責任をもつプレッシャーもあったのかもしれない。幸い、同僚のセンター員や事務局スタッフふたりの理解と協力のおかげで、各事業やプロジェクトは滞りなく継続できた。日光プロジェクトをはじめ、三大学研究コンソーシアム、コラボレーション・フェア等、センター業務の大変さを実感した一年でもあった。皆様に感謝申し上げる次第です。ただ、地域連携の拠点でありつつ、センターの将来を見通す重要な課題はまだいくつか残っている。

令和の典拠に因んで、中国東漢時代張衡作「帰田賦」を借りて新時代・次年度への心境を披露し結びとする。「於是仲春令月時和氣清原隰鬱茂百草滋榮王睢鼓翼倉庚哀鳴交頸頡頏關關嚶嚶於焉逍遙聊以娯情」。